

文化経済学会<日本> 会長就任にあたって

文化経済学会<日本>第XVI期会長

清水 裕之

文化経済学会<日本>の会員の皆様、2012年9月29日より会長に就任いたしました清水裕之です。専門はご存じのとおり、建築学、都市計画学です。

文化経済学会<日本>の結成の契機の一つは、当時計画中の新国立劇場の計画とその運営体制の検討のために、文化庁が支援する形で行ったいくつかの分野横断型研究でした。山崎正和、三善晃、倉林義正ほか文系の諸先生がリードされ、日本芸能実演者団体協議会も参加した、非常に幅広い研究連携でした。当時私は、博士をとりたての新米研究者でしたが、劇場建築に精通する研究者が非常に少なかったこともあり、新国立劇場を設立するために文化庁に設置された事務局に非常勤職員として採用され、オペラハウスを含む新国立劇場の建築計画にかかわるようになっており、偶然にも、これらの異分野連携の研究プロジェクトに参加することができました。

私が書いた学位論文は「文化会館の構造転換」と題するもので、工学の学位論文ではありませんが、中身は、貸館運営中心の文化会館（公立文化施設あるいは、公共ホールなどとも呼ばれる）を、どのように舞台芸術のための創造的な施設に転換できるかという、運営に踏み込んだ内容でした。当時の公立文化施設に対する社会的な非難は、建築家はろくな建物を設計しない、全く中身がわかっていないというものでした。しかし、色々と調べてゆくと、建築に向けられている批判の多くは、実は、非創造的な運営スタイルそのものへの非難であることがわかってきました。床にくぎを打てるようにしてほしい、開館時間、閉館時間が実情に合わない、演出の中身をわかってもらえず、あれはだめ、これはだめというなど、本当に多くの非難は、官独特の閉鎖的な管理論理によって阻害される創造者（舞台芸術家、技術者）からのやり場のない非難でした。博士論文では、最終的な施設利用者である舞台芸術を楽

しむ観客に対して、公立文化施設と芸術家、技術者がどう連携すれば、創造的な施設運営ができるのかということを中心にしようと考へて執筆しました。

このようなことを考へていたときに、ちょうど、異分野の先生方と連携をさせてもらうチャンスが巡ってきたのです。しかし、最初は、とても戸惑いました。まず、言葉がわからなかったのです。経済学、統計学など、少しは大学の教養でかじったと思っていましたが、そんな生半可の知識は研究の現場では通用しませんでした。また、建築学の分野では、過去の研究へのアクセスはもちろん大切ですが、それよりも、新しい理論や実証的な事実を提示することの方が、より高く評価されます。しかし、多くの文系分野では、海外、あるいはずっと古くまでさかのぼった先人の研究成果との関連性にもとづいた論理性をととても大事にします。とにかく、本当に毎日戸惑い続け、私たちに要請されている成果を上げようと試みしました。私たちが持っていた強みは、全国の官、民の劇場（公立文化施設を含む）のデータベースでした。それまで、何度も、全国の劇場に対して、施設、あるいは運営に関連する調査を行っていたので、それらの蓄積が有効に利用できました。全国の劇場、特に公立文化施設についての調査は、その後も数年ごとに繰り返して今日まで続いています。その継続をサポートしてくださったもの、先の研究で知り合った先生方でした。

さて、何を言いたいのかといいますと、文化経済学会<日本>とは、経済学という名前がついていますが、非常に学際的な分野をかかえて出発した学会だということです。設立した1992年当初は、どちらかということ、学会活動を事務局として長く支えてくださった日本芸能実演者団体協議会も含めて舞台芸術に関心を持つメンバーが多くおり、研究内容も、その傾向が強かったのですが、それでも、文系研究者、建築・都市計画系

研究者、実演家、舞台技術者など、単なる学術組織ではない多様な広がりを持っていました。文化経済学会の最初の研究集会を盛り込んだ1993年の世界劇場会議においても、多彩な方々の参加をいただき、将来の舞台芸術やその社会的支援のあり方について、熱い議論が展開されたことを覚えています。

今、20年を経過して、振り返ると少し異なる傾向が見えてきます。まず、研究分野においては、劇場や美術館など文化施設や文化活動に関する研究はむしろ少なくなり、メディア、観光、文化遺産など非常に幅広い研究が報告されるようになってきました。これは、非常に好ましい傾向だと思います。文化という枠組みは、本来、非常に幅広いものであり、舞台芸術や美術分野に限るものではなくからです。しかし、一方で、実務者、現場の方々の参加が少なくなりました。

現場の方々は、今すぐに効き目のある処方箋を期待して、学会に参加すれば、現在の状況を改善してくれる理論や政策への考え方がわかるとお考えだったのかもしれませんが、しかし、学術領域では、そうした即効性のある処方箋は、それほど出せるものではありません。このことに失望されたのか、次第に現場の方、実務者の方々の参加が少なくなってきました。これは、必ずしもいい方向でないと考えています。

トランスディシプリナリーという言葉が最近よく耳にします。いわゆる学際、インターディシプリナリーという用語が、異分野の学術連携に使われるのに対して、これは、異分野の学術連携の成果をどのように社会に還元できるかというところまで踏み込んだ社会的連携を意味しているそうです。文化経済学会<日本>は、その設立においては、まさにこのトランスディシプリナリーな学術貢献ができる組織として立ち上がったはずでした。できれば、もう一度、そうした姿勢を回復できないものかと考えています。もちろん、学会発足当時に比べて、扱う対象が幅広になったので、その中で、どのようにトランスディシプリナリーな体制がより強化できるのか、それは、とても難しい課題だと思います。しかし、後藤前会長をはじめとする皆さんのご努力の結果、文化経済学会<日本>は、国際文化経済学会京都大会を見事成功させ、世界の文化経済関係者から高い評価をいただくことができました。このことを一つの誇りとして、次のステップとして、いかにトランスディシプリナリーな成果を期待できる学会に成長させてゆくことができるのか、皆さんとともに考えてみたいと思います。お付き合いをいただければ幸いに存じます。

NEWS for Cultural Economics

**2012年
11月24・25日
(土・日)**

2012年度研究大会は、熊本県熊本市で開催されます

大会テーマは「地方における創造都市戦略の可能性：都市間連携を視野に置いて」

2012年度研究大会の概要が決まりましたのでご案内いたします。2012年11月24日(土)、25日(日)の2日間にわたり、熊本県熊本市にある熊本大学本荘・九品寺キャンパス及び黒髪キャンパスにて開催いたします。

なお24日と25日の開催キャンパス・所在地が違いますのでご注意ください。また、今回は、25日の分科会終了後、特別な企画として「熊本セッション」が開催されます。

■日程：2012年11月23日(金)・24日(土)・25日(日) *23日と24日午前は、エクスカージョン

◎11月23日(金)

13:30~17:00	エクスカージョンA-① ◆くまもとアートポリス 25周年記念国際シンポジウム 「熊本から、みんなで考える一郷土、文化的遺産、世界」(くまもと森都心プラザ)
18:00~19:30	エクスカージョンA-② ◆くまもとアートポリス 25周年記念サロントーク 「建築とアートが出会うとき」(熊本市現代美術館)

19:30～20:30	エクスカーションB ◆熊本市現代美術館案内 「生きる場所 ボーダーレスの空へ」展、「最新の建築力」展、「熊本まちなみトラスト」展等（熊本市現代美術館）
-------------	---

◎11月24日（土）

会場：熊本大学本荘・九品寺キャンパス（地区A）医学教育図書棟第一講義室・安全講習室

9:30～12:00	エクスカーションC ◆城下町の歴史と文化を巡るまちあるきツアー （新町・古町～中心商店街）
12:00～13:00	移動・昼食
12:30～	受付開始
13:30～13:45	清水裕之新会長挨拶
13:45～14:30	幸山政史熊本市長講演
14:30～14:45	休憩
14:45～17:15	パネルディスカッション 『地方における創造都市戦略の可能性：都市間連携を視野に置いて』 司会 藤原 惠洋（九州大学大学院教授） パネリスト 渡部 薫（熊本大学大学院教授）・・・全体の趣旨説明 駄田井 正（久留米大学教授） 藤本 広一（福岡市企画課長） 葉山 耕司（紅蘭亭グループ取締役／ストリートアートプレックスくまもと 実行委員長） 岩崎 千夏（熊本市現代美術館・事務局次長） 古賀 弥生（アートサポートふくおか代表／活水女子大学特別専任教授） 中村 大輔（国際東アジア研究センター・上級研究員／九州大学大学院客員 准教授）
17:15～19:00	閉会・移動
19:00～21:00	懇親会 会場：イル・ジャルディーノ （熊本市花畑町13-10 セカンドサイト2階 電話096-323-1121） ※アトラクションを用意しています

◎11月25日（日） 会場：熊本大学黒髪キャンパス（北地区）文学部・法学部棟

9:00～	受付開始
10:05～11:50 ※1-Dのみ 9:30～開始	分科会① 1-A 映像産業と文化発信 1-B 伝統文化と無形文化遺産政策 1-C 文化の計量分析 1-D クリエイティブ集積とネットワーク
11:50～13:00	ランチタイム
13:00～15:20	分科会② 2-A まちづくりと文化経済 2-B 文化イノベーションと大学の役割 2-C 非日常空間とアートプロジェクト 2-D コンテンツ・クリエイティブ産業の分析
15:20～15:40	休憩
15:40～17:30	熊本セッション A. 地域を動かすポップカルチャー、熊本の新しい可能性 B. 公共財としての「くまモン」 C. くまもとの恵みの酒

■会場

・11/24（土）

熊本大学 本荘・九品寺キャンパス（地区A）

医学教育図書棟第一講義室・安全講習室

・11/25（日）

熊本大学 黒髪キャンパス（北地区）

文学部・法学部棟

・マップ・各キャンパス（地区）へのアクセス

http://www.kumamoto-u.ac.jp/campus_jouhou

今回の学会会場、11月24日（土）の医学部・大学院のある本荘・九品寺キャンパスと11月25日（日）の黒髪キャンパスは、離れていますのでご注意ください。

熊本市の東、益城町にある熊本空港（阿蘇くまもと空港）から熊本市の都心部の交通センターへは、リムジンバスで50分程度かかります。

■ホテル等について

宿泊は、両キャンパスに移動されるに当たって、都心部の熊本城周辺、交通センター周辺や上通・下通周辺が便利です。また、懇親会場「イル・ジャルディーノ」（熊本市花畑町13-10 セカンドサイト）は下通アーケード近くで、周辺にもホテルは多数あります。

JR熊本駅は熊本市の西寄りにあり、交通センターや都心部へは、市電（路面電車）や公共バスでの移動が必要で、両キャンパスからは更に離れています。

本大会開催の前後は、学会、コンベンション等でホテルの混雑が予想されますので、早めの予約をおすすめします。

◎コンベンション協会のホテル検索サイト

<http://www.kumamoto-icb.or.jp/stay/stay.php>

ホテル分布図は次ページ参照

■各キャンパスへのアクセス・交通機関について

◎11/24（土）本荘・九品寺キャンパス（地区A） 熊本市中央区本荘1丁目1番1号

・キャンパスマップ

http://www.kumamoto-u.ac.jp/campus_jouhou/map_hon_jyou_1

・最寄バス停：大学病院前（空港・交通センター間は所要約50分・670円、交通センター・大学病院前間は所要約10分・130円）

・熊本空港からは、空港リムジンバス（熊本駅行き）に

乗車し「交通センター」下車。

交通センターで熊本都市バス：八王寺環状線〔南1〕

または流通団地線〔南4〕に乗車し「大学病院前」下車。

熊本都市バス：

<http://www.kumamoto-toshibus.co.jp/search/bt64t251.php>

または、交通センターで熊本バス：御幸木部線〔南2〕

に乗車し「大学病院前」下車。

熊本バス：

<http://www.kuma-bus.co.jp/businfo/timetable/select.htm>

<http://www.kuma-bus.co.jp/businfo/cgi/table/program/kbstap.pl?ts=1000>

・熊本駅からは、熊本都市バス：第一環状線〔駅2〕（大学病院・大江渡鹿経由）に乗車し「大学病院前」下車。

◎11/25（日）黒髪キャンパス（北地区） 熊本市中央区黒髪2丁目40番1号

・キャンパスマップ

http://www.kumamoto-u.ac.jp/campus_jouhou/kurokamikitaku

・最寄バス停：熊本大学前（空港・通町筋間は所要約40分・660円、通町筋・熊本大学前間は所要約10分・140円）

・熊本空港からは、空港リムジンバス（熊本駅行き）に乗車し「通町筋」下車、「通町筋」から産交バスで楠団地、武蔵ヶ丘等（子飼橋経由）行きに乗車し「熊本大学前」下車。

・交通センターからは、産交バス：楠団地、武蔵ヶ丘等（子飼橋経由）に乗車し「熊本大学前」下車。

・熊本駅からは、産交バス：楠団地、武蔵ヶ丘等（子飼橋経由）に乗車し「熊本大学前」下車。

産交バス：

<http://www.kyusanko.co.jp/sankobus/rosen/bt62t201.php?Ent=1>

◎熊本大学黒髪キャンパスから空港への帰路

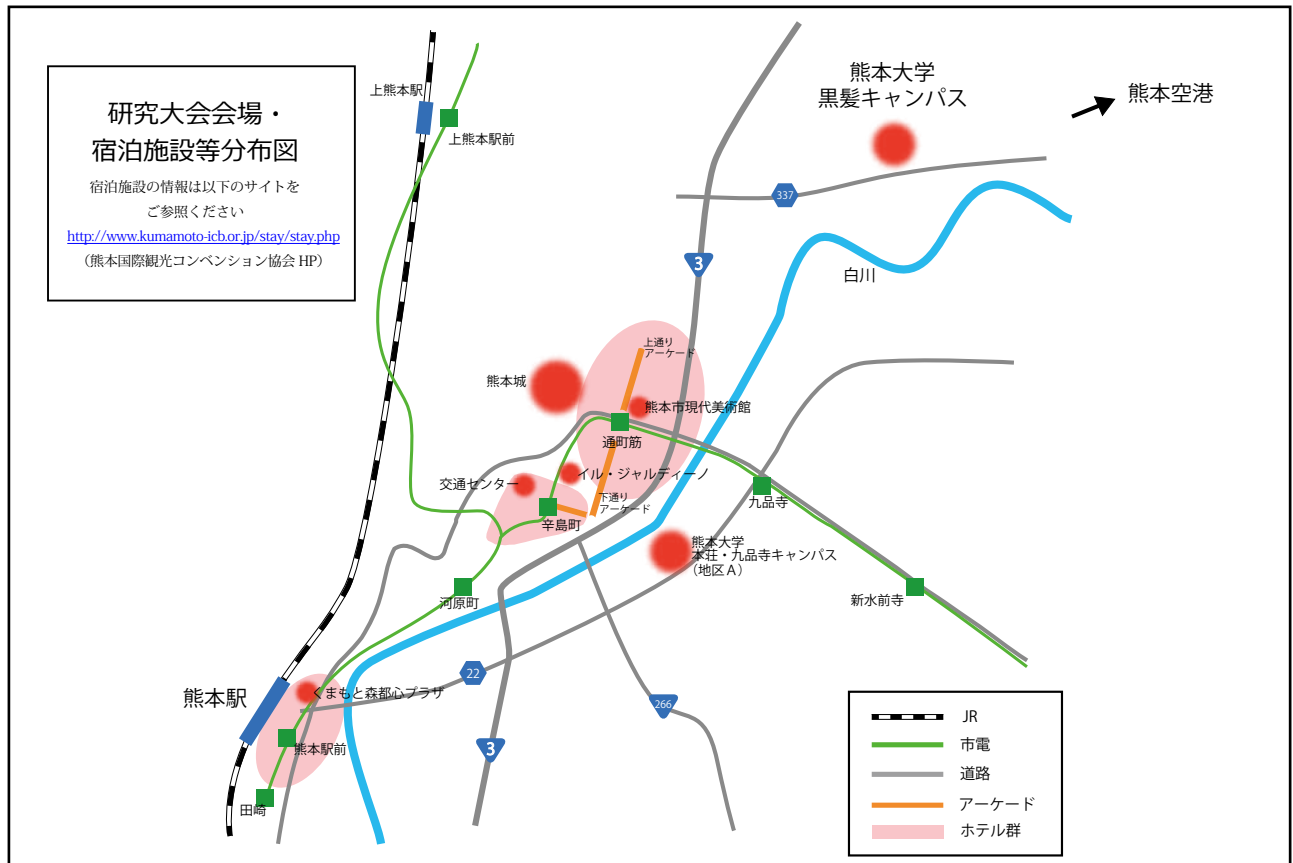
・熊本大学黒髪キャンパスからは、産交バス（交通センター行き）に乗車し「通町筋」下車、「通町筋」から空港リムジンバスで空港へ。（通町筋・空港間は所要約40分）

産交バス：

<http://www.kyusanko.co.jp/sankobus/rosen/bt62t201.php?Ent=1>

※熊本空港リムジンバス：

<http://www.kyusanko.co.jp/sankobus/airport/limousine/>



◎福岡空港を利用の場合

- 各地からの路線・便数ともに充実している福岡空港からは、福岡空港・熊本間的高速バスがあります。

<http://www.nishitetsu.co.jp/bus/highway/guide/hinokuni.htm>

また、地下鉄で博多まで行き、博多駅から JR 新幹線で熊本駅までのルートもあります。

■参加料等

- 参加料 会員 2,000 円、非会員 4,000 円、学部生 2,000 円 (学生証をお持ち下さい)
- 懇親会費 5,000 円 イル・ジャルディーノ (イタリアン・レストラン; 熊本市中心部、花畑町 13-10 セカンドサイト内)
- 大会昼食弁当 (11月25日のみ) 1食 1,000 円 (お茶付 事前申し込みが必要です)
- 会費、懇親会費は郵便振替にてご送金ください。また、エクスカッションは別途申し込んでください。

■熊本セッション

熊本をテーマに、熊本で現在進行形の文化現象を経済

的視点も交えて読み解き今後を展望する。

- 日時: 25 日 (日) 15:40 ~ 17:30
- 場所: 熊本大学黒髪キャンパス (北地区) 文学部・法学部棟 (分科会と同会場)
- セッションA: 地域を動かすポップカルチャー、熊本の新しい可能性

熊本でアニメ・マンガを中心としたポップカルチャーの担い手として活動する人たちを呼び、ヒト・モノ・カネの新しい動きについてパネルディスカッション形式で発表、討論します。

●参加予定者

- 司会 佐竹信彦 (NPO 法人グランド 12)
- 柿崎俊道 (ライター、編集者; 『聖地巡礼 アニメ・マンガ 12カ所巡り』 著者)
- 橋本 博 (NPO くまもとマンガミュージアムプロジェクト代表)
- 切通 俊 (ファラグラフィックス)
- 遠藤辰己 (寺岡デジタルワークス)
- 笠原史徳 (HIGOm@tic)

●セッションB: 公共財としての「くまモン」

5,000 件を超える使用件数、商品総販売額は 30 億円

以上（一説では100億円超とも）と言われ全国区となった“ゆるキャラ”。県が管理・運営する“公共財”としての「くまモン」だが、果たして当初の目的の達成度は如何に。ゆるキャラ研究の第一人者である荒木先生にも参加いただき、直接的な経済効果だけではなく、地域の象徴財としての今後の活用の仕方、また、地域に与える影響等についても論じます。

・参加予定者

司会 朝田康禎（熊本大学法学部准教授）
荒木長照（大阪府立大学教授）
坂本孝広（熊本県くまもとブランド推進課長）
濱田康成（濱田醤油社長：登録文化財の建物・産業遺産を有する老舗）
内田祐史（地域経済総合研究所・調査部長）

●セッションC：くまもとの恵みの酒

熊本では、清酒、焼酎、ワインと3種類もの酒をつくることができます。この熊本の豊かな水、農、食文化の象徴として「酒」をテーマに、ブランディング、まちづくり、環境などについてディスカッションを行います。

・参加予定者

司会 田中尚人（熊本大学政策創造研究教育センター准教授）
川上 靖（熊本古町・川上酒店）
吉村健太郎（熊本川尻・瑞鷹）
玉利博之（熊本・熊本ワイン）
高橋恭奈（人吉・高田酒造）
山村弥太郎（人吉・山村酒造）
鳥越英夫（球磨地方・鳥越商店）
田中智之（熊本大学大学院自然科学研究科准教授）
飯田俊行（地域経済総合研究所 主席研究員）

■エクスカーショーン：

「古さと新しさの共存、まち、建築、人がアートで繋がるまち」

Aコース：今年で25周年を迎え、県内に80を超えるプロジェクトを立ち上げてきた「くまもとアートポリス」の記念シンポジウムとサロントーク。ドイツの建築家、ペーター・ヒューブナーによる基調講演と、蒲島県知事、脚本家の小山薫堂、建築家の伊東豊雄による鼎談、夕方からは熊本市現代美術館で、建築家の曾我部昌史（みかんぐみ）と藤本壮介によるトークを聴くことができます。

Bコース：今年10周年を迎えた熊本市現代美術館の学

芸員による案内ツアー。街の中心にある現代美術館として、市民とどう関わって来たか、開催中の展覧会を含め、くつろぎの空間の成り立ちを聴きます。

Cコース：住民によるリノベーションが進む新町・古町地区の町屋、再開発を模索する桜町・花畑地区、そして西日本最大級とも言われる中心商店街のアーケードなど、過去と現在のレイヤーを掛けた城下町ならではの熊本の街並みを歩きます。（案内役：熊本まちなみトラスト会長 西嶋公一）

●日時（集合）会場

2012年11月23日（金）

A-①コース 自由参加 13:30～17:00

くまもと森都心プラザ：熊本市西区春日1-14-1
直接、5階プラザホールへお越しください

<http://stsplaza.jp/>

A-②コース 自由参加 18:00～19:30

熊本市現代美術館：熊本市中央区上通町2-3
直接、館内のホームギャラリーへお越しください

<http://www.camk.or.jp/>

Bコース 19:30集合 19:30～20:30

熊本市現代美術館受付集合

2012年11月24日（土）

Cコース 9:20集合 9:30～12:00

熊本市役所前集合 新町・古町～市電利用～中心商店街

●参加費：A・Bコースは無料、Cコースのみ500円。

●申込み方法および問い合わせ先：

A・Bコース 申込み不要

定員：A-①コース 400名

A-②コース 100名程度

Bコース 40名程度

A・Bコースは申込み不要ですが、A-①コースのシンポジウムについては、参加者多数の場合立ち見になる場合がございます。確実に席をお取りになりたい場合は、以下のサイトから予め申込み手続きを行ってください。

<http://www.pref.kumamoto.jp/site/artpolis/kentikuten-kokusaisinnpo.html>

A・Bコース問い合わせ先：熊本市現代美術館

〒860-0845 熊本市中央区上通町2-3

E-mail：gamadas@camk.or.jp

担当者：坂本・岩崎

Cコース 申込み必要

メール又は郵送にて、氏名、連絡先を明記の上お申込み下さい。

申込み締切：2012年11月20日（火）

※キャンセルの場合は、11月20日までにご連絡下さい。

※申込み多数の場合ご参加いただけない場合がありますので、お早めにお申込み下さい。

定員：20名

Cコース申込み・問い合わせ先：オフィス・ムジカ

〒860-0805 熊本市中央区桜町2-12

E-mail：info@officemusica.com

担当者：西嶋公一

■主催：文化経済学会〈日本〉

■共催：熊本大学大学院社会文化科学研究科

■協力：熊本市現代美術館、熊本まちなみトラスト

■後援：熊本大学法学振興会、熊本国際観光コンベンション協会、熊本経済同友会、熊本商工会議所、熊本県文化協会、熊本ルネッサンス県民運動本部

分科会プログラム

分科会① 11月25日(日) 10:05～11:50 ※①-Dのみ 9:30～11:50

①-A 映像産業と文化発信

座長 阪本崇(京都橋大学)

論題	「アキハバラを、編む」 ～秋葉原における新しい文化発信コミュニティの可能性～
発表者	梅本克(デジタルハリウッド大学)
討論者	太下義之(三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株))
論題	映画祭のマネジメント
発表者	矢澤利弘(映画専門大学院大学)
討論者	杉浦幹男(大阪市立大学)
論題	イギリスの映画政策 —創造産業政策とナショナル・シネマ促進策は矛盾するのか?
発表者	河島伸子(同志社大学)
討論者	太下義之(三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株))

①-B 伝統文化と無形文化遺産政策

座長 後藤和子(埼玉大学)

論題	和菓子の需要機会からみる都市文化の多様性について ～九州の歴史と伝統から～
発表者	森崎美穂子(大阪市立大学大学院)
討論者	藤原恵洋(九州大学)
論題	伝統芸能の保存継承と普及を目指した市民参加型舞台芸術の実演と評価に関する研究
発表者	北岡慶子(九州大学大学院)
討論者	高島知佐子(京都外国語大学)
論題	無形文化遺産の保護と活用に関する一考察
発表者	角美弥子(政策研究大学院大学)
討論者	関鎮京(北海道教育大学)

①-C 文化の計量分析

座長 勝浦正樹 (名城大学)

論題	学生の実演芸術鑑賞の現状と20年間の変化
発表者	有馬昌宏 (兵庫県立大学)
討論者	清水裕之 (名古屋大学)

論題	Do winner always love aggressive music or movie? Study about the phenomena that sad music is sustainedly loved even in economic boom
発表者	保原伸弘 (一橋大学)
討論者	八木匡 (同志社大学)

論題	貴重品概念の検討
発表者	作間逸雄 (専修大学)
討論者	八木匡 (同志社大学)

①-D クリエイティブ集積とネットワーク ※9:30開始

座長 佐々木雅幸 (大阪市立大学)

論題	福岡における既存建築のリノベーションを通して創出されたクリエイティブクラスターの評価と課題
発表者	馬麗娜 (九州大学大学院)
討論者	本田洋一 (大阪市立大学)

論題	学生演劇祭による美濃加茂市の芸術文化振興
発表者	大前研二 (青山学院大学大学院)
討論者	友岡邦之 (高崎経済大学)

論題	まちかど博物館ネットワーク化による地域間連携の可能性 —三重県まちかど博物館を事例として—
発表者	富本真理子 (岐阜女子大学)
討論者	中川幾郎 (帝塚山大学)

論題	過疎地における創造的人材集積の成功要因分析試論
発表者	野田邦弘 (鳥取大学)
討論者	友岡邦之 (高崎経済大学)

分科会② 11月25日(日) 13:00~15:20

②-A まちづくりと文化経済

座長 小野田泰明 (東北大学)

論題	わが国の学校教育における芸術体験事業としてのオーケストラプログラムの今日的課題の考察
発表者	砂田和道 (相愛大学)
討論者	古賀弥生 (活水女子大学)

論題	第三の場所としての図書館の可能性についての一考察
発表者	岩井千華 (九州大学大学院)
討論者	川井田祥子 (大阪市立大学)

論題	千年都市菊池における市民主体のまちづくり中間支援「菊池養生詩塾」の創出と活動展開
発表者	佐藤忠文 ((独)大牟田市立病院)
討論者	古賀弥生 (活水女子大学)

論題	まちづくりの契機としての文脈・矜持・紐帯の再生がもたらす補完性と創発性の検討 ～熊本県菊池市における菊池文化資源総合調査を通して～
発表者	藤原恵洋 (九州大学)
討論者	川井田祥子 (大阪市立大学)

②-B 文化イノベーションと大学の役割

座長 清水裕之（名古屋大学）

論題	創造・イノベーションの空間としての地域と大学の役割
発表者	本田洋一（大阪市立大学）
討論者	野田邦弘（鳥取大学）

論題	市民と大学の連携による日田ラボの創出を通じたまちづくり中間支援活動の評価と課題
発表者	高倉貴子（技術・市場交流プラザ日田）
共同発表者	藤原恵洋（九州大学）
討論者	野田邦弘（鳥取大学）

論題	福井・加賀連携観光フィールド大学の実践 —加賀市丸ごとキャンパス構想—
発表者	山崎茂雄（福井県立大学）
討論者	佐々木雅幸（大阪市立大学）

論題	創造都市金沢における美術工芸大学の役割と使命
発表者	前田厚子（慶應義塾大学大学院）
討論者	佐々木雅幸（大阪市立大学）

②-C 非日常空間とアートプロジェクト

座長 中谷武雄

論題	フランス・ロリアンにおけるヴァカンスの日常性
発表者	田中尚人（熊本大学）
討論者	勝浦正樹（名城大学）

論題	地域型アートプロジェクトにおける若者の成長の場としての可能性
発表者	藤原旅人（九州大学大学院）
討論者	勝浦正樹（名城大学）

論題	炭鉱を文化資源とした市民主体のアートプロジェクトによる産炭地再生の試み
発表者	國盛麻衣佳（九州大学大学院）
討論者	有馬昌宏（兵庫県立大学）

論題	芸術創造と公共政策の共創を誘発するアートプロジェクト
発表者	谷口文保（神戸芸術工科大学）
討論者	有馬昌宏（兵庫県立大学）

②-D コンテンツ・クリエイティブ産業の分析

座長 八木匡（同志社大学）

論題	日本における創造産業政策の現状と課題 —アニメ産業の人材育成の取り組みを事例として—
発表者	稲熊太郎（同志社大学大学院）
討論者	後藤和子（埼玉大学）

論題	台湾における文化創意産業と文化創意園區の形成過程と実態に関する研究 —「華山文化創意園區」を事例として
発表者	廖偉汝（広島大学大学院）
討論者	後藤和子（埼玉大学）

論題	コンテンツ・ツーリズムから見る文化と心理のあり方
発表者	牧和生（青山学院大学大学院）
討論者	河島伸子（同志社大学）

論題	沖縄県における文化の産業化の取り組み ～コンテンツファンドによる資金的支援と組織化、その課題～
発表者	杉浦幹男（大阪市立大学）
討論者	河島伸子（同志社大学）

第 17 回国際文化経済学会大会 (ACEI2012)

開 催 報 告

2012年6月21日～24日にかけて、本学会20周年記念事業の一つとして国際文化経済学会の大会が京都・同志社大学にて開催された。筆者もこの開催に向けて2年以上の間仕事をしてきたが、何より参加者数が多く、内容的にも充実した国際会議が無事に終了したことに安堵している。合計40カ国から348名（内、日本人138名、本会非会員を含む）が参加するという、ACEIの記録に残る盛会であった。当会の会員の多くも参加していた。

今回のプログラムは、これまでの欧米開催地での内容を踏まえ、初日にエクスクーショナルな見学会、若手ワークショップ、レセプションがあり、2日目から本格的に基調講演、分科会、パネル・ディスカッションのセッションなどが4日目まで続いた。まず学術プログラム面から述べると、基調講演にあたるものが3つ(Liebowitz教授、Ginsburgh教授、Fujita教授)あったが、どれも質的に非常に高く、文化経済学のこれまでを振り返るものから、今後の発展可能性を示唆するものまで豊かな内容であった。他に、パネル・ディスカッションとして組まれたものが4つあり、こちらもゲーム産業の経済分析から無形文化遺産に至るまで幅広い議論が交わされ、日本人パネリストの活躍も目立った。分科会は、7つから8つを同じ時間帯で走らせるほどであり、合計54ものセッション、セッションあたり4本の報告があったことからすると、200以上の報告があったことになる（直前のキャンセルなどもあったため、正確な数字ではない）。この手の国際会議に行くと、座長が来ていなかったり、パソコンが動かなかったり、と何かとトラブルがあるものだが、そういうこともなく、参加者たちは満足いくまで議論を交わすことができたようである。

文化交流的な側面にも配慮し、まず初日に京都市の京都国際マンガミュージアムを訪れることとした。悪天候にもかかわらず（直前に季節外れの台風上陸があった）、100名ほどの人が参加し、京都精華大学のベルント教授のレクチャーにも耳を傾けた。一方、最終日全てが終了した後は、喜志田会員のご厚意で伏見の酒蔵ツアーをもうけ、10数名が参加した。こちらもとても楽しく、

大好評だったようである。会期中には、生け花パフォーマンスを講演の合間にはさみ見てもらった。若き未生流家元の舞台上でのパフォーマンスと解説があったが、皆、そもそも家元の所作が美しく、話された内容の一貫性と意味深さにも感激を増していた。また全員招待（参加費に含まれていた）の懇親会は、350人分用意した食事が全てなくなる大盛況ぶり、乾杯前に披露された六斎念仏を見たことも大きな収穫となった。

ここまで大盛況であったことには、後藤和子会長の身を挺しての努力があったことは言うまでもないが、多くの方々の支援に支えられたことも大きい。ここで各人、各社の名前をあげることはできないが、後援、助成、寄付、現物寄付その他の支援に改めて感謝したい。運営チームとして活躍してくれた会社の方々も素晴らしい働きぶりであった。このことは海外からの参加者にも十分わかってもらえたようで、皆、口々に感謝の言葉を述べながら帰ってくれた。運営会社から後日、全座長にある事項の確認メールを出したところ、事務的な返事で事足りるところを、「本当にありがとう。これまでのACEIで最もよかった」などと一言心のこもった言葉をそえて返してくれており、社交辞令以上の気持ちを感じることができたことは、運営側に立った私達としては望外の喜びである。

特に学術面について、さらに詳しい内容は学会誌等に掲載予定であるので、ぜひそちらも参照されたい。

(河島伸子)

学会誌「文化経済学」編集委員会より

1. 論文の投稿について

「文化経済学」は、年2回発行され、年2回の区切りで投稿論文を受け付けています。

		第10巻第2号 (通巻第35号)	第11巻第1号 (通巻第36号)
締切	論文エントリー	2013年1月末	2013年7月末
	論文提出	2013年3月末	2013年9月末

<応募・掲載条件>

論文の応募(エントリー)は本学会員に限られます。学会費が未納の方は論文のエントリーをすることはできません。掲載には、査読委員の審査を経て掲載が妥当と認められること、掲載料をお支払いいただくことが条件となっています。(2ページ毎に6,000円、ただし、50部の抜き刷りを配布いたします)

<応募方法>

FAX、email、郵送のいずれかで、下記7点を事務局(本誌末の連絡先)までお送り下さい。

①応募日付 ②応募者名 ③会員番号 ④所属 ⑤タイトル ⑥論文要旨(400字程度) ⑦応募者連絡先

<応募にあたっての留意事項>

- ・過去の研究への言及と、従来の研究の流れの中での自己の研究の位置づけ、または独自性が明確になっていること。
- ・論証や実証に必要な文献・資料の参照が行われていること。
- ・歴史的事実等については、事実が正確であるかどうかの確認を行っていること。
- ・応募する論文は未公表のものであること。また、他の学術誌等への投稿の予定がないものに限る。
- ・提出先・提出方法・原稿の形式などの詳細は、文化経済学会のウェブサイト参照のこと(執筆要項は2011年5月に改訂されております)。

文化経済学会<日本>の論文募集のウェブサイト：<http://jace.gakkai.ne.jp/bosyu.html>

2. 学会誌における書評について

学会誌の書評で取り上げて欲しい本がありましたら、メールにて書名をお知らせください(宛先: ktomooka@tcue.ac.jp)。また、書評のための献本をしていただける場合は、友岡邦之編集長まで送付をお願いいたします(宛先: 〒370-0801 高崎市上並榎町1300 高崎経済大学地域政策学部 友岡邦之宛。なお、事務局宛の献本は受け付けておりませんので、ご注意ください)。その後編集委員会で検討し、取り上げるべき本と判断されれば、評者を選定の上、学会誌に書評を掲載します。

理事会報告

文化経済学会<日本>第X期第8回理事会

日 時：2012年 5月12日(土) 16:00～18:00

場 所：同志社大学今出川キャンパス 光塩館 地下
会議室

出席者：後藤会長、清水副会長、河島理事長、勝浦、阪本、
佐々木(雅)、中谷、野田、藤原、八木、事務局
2名

委任状提出：26名、2団体

欠 席：3名、1団体

〈第1号議案〉 会員の入退会について

入会希望者5名の入会が了承され、以前に休会を希望した退会者の再入会希望者1名の入会も、了承された。また退会希望者15名のうち11名の退会を了承し、4名に関しては慰留することとした。現理事1名の退会希望については、理事会預かりとした。

〈第2号議案〉 2012年国内研究大会及び総会について

河島理事長より、熊本大学で開催される2012年の国内研究大会の日程は、11月24～25日で確定したことが報告された(エクスカッションは23日の予定)。また実行委員会には大会の企画・運営などについて早急に検討し、決定して欲しい旨の依頼が大会の担当理事になされた。

さらに河島理事長より、本年度の総会は、9月29日に埼玉大学東京ステーションカレッジにおいて開催され、東北大学の小野田泰明先生による特別講演もあわせて行われることが報告された。

〈第3号議案〉 第XI期役員選挙について

清水副会長より、4月28日に選挙管理委員の立会いの下で行われた第XI期役員選挙の開票結果について報告がなされ、各役員を選出を行った。

副会長は河島伸子氏が投票総数92票中、54票の得票数で選出され、承認された。

個人理事については、選出する理事の数を確認した上で、得票数8票までの15名(副会長選出者を除く)に加え、地域・実務家と研究者・専門領域のバランスなどを考慮した10名を追加し、25名の方を理事とすることが承認された。

個人監事は、吉田和男氏にお願いすることとなった。

団体理事は、引き続きこれまで同様に依頼すること

となった。

さらに、被選挙人の登載名簿順、オンライン選挙の問題点の改善、選挙の周知方法等について、引き続き検討していくこととした。

なお、この議案の審議については、理事会後、理事は個人会員から選挙結果の上位30名程度を選出するという選挙細則に抵触することが判明したため、再度、三役で合議し、改めて三役案を作り、理事全員の可否を求めることとした。

〈第4号議案〉 20周年記念事業寄付金募集活動について

河島理事長より、寄付金の募集活動の総括につき説明があり、協賛金の合計金額は2,931,780円となったが、募金活動は2012年6月までは継続する旨の報告がなされた。

〈第5号議案〉 国際学会準備について

後藤会長より、国際学会の準備状況につき説明があった。

次に勝浦理事から、編集委員会が中心となって国際学会の記録を作成するので、理事をはじめとする学会員に協力をお願いしたい旨の報告がなされた。

〈第6号議案〉 2013年国内研究大会について

2013年の国内研究大会の日程は、第1候補を6月29～30日、第2候補を6月22～23日とすることとした。

〈第7号議案〉 その他

- ・地域支部の最近の活動状況について報告がなされた。
- ・河島理事長より、ニューズレターのリニューアルに関して問題提起がなされ、意見交換が行われた。担当理事も含め、今後さらに検討していくことが確認された。
- ・次回の理事会は、2012年9月29日に開催される総会・特別講演に先立って開催することとなった。

入退会情報（敬称略）

●第X期第8回理事会（2012.5.12）にて承認

入会

海野敏（東洋大学）／勝村務（北星学園大学）／
高橋あゆみ（昭和音楽大学）／陳怡如（神戸大学）／
横山利夫（慶應義塾大学）

退会

14名

●理事による書面審査にて承認（2012.7.9）

入会

廖偉汝（広島大学大学院）／公益財団法人東京都歴史
文化財団 アーツカウンシル東京準備機構（団体会員）

●理事による書面審査にて承認（2012.8.27）

入会

赤池美紀(トラストコスモ(株))／岩井千華(九州大学)
／北岡慶子(九州大学)／後藤康雄(京都大学)／小宮
かおり(東京藝術大学)／佐藤忠文(大牟田市立病院)
／田中尚人(熊本大学)／藤原旅人(九州大学)／馬麗
娜(九州大学)／森崎美穂子(大阪市立大学)

《支部活動報告》 北海道支部活動報告

日時 2012年9月13日（木）19:00～20:30

場所 札幌市中央区 CAFE らてるね

トークショー 「アートは仕事になるのか？」

西田 卓司氏（美術家）

伊藤 隆介氏（北海道教育大学教授）

聞き手 伏島 信治（本学会会員）

2012年2月、札幌市内のシアターZOOで『演劇は仕事になるのか？』の著者で本学会の会員でもある米屋尚子さんを招いて同名のセミナーが開催された。「札幌演劇シーズン」という演劇の普及と職業的自立を目指すロングランイベントが本格化した時期と重なって、しんどいけれど前に進もうという機運がいつそう高まったと思う。

このテーマを借りて次はアートでやってみようと考えたのは、筆者が経営する札幌市内のカフェで個展を開催した若いアーティストの西田卓司さんが、自身のブログで「大学の同期で美術家になったのは自分だけ」と語っているからであった。彼が在籍したのは名門の北海道教育大学芸術課程美術コース（定員40数名）。早速、このコースの教授を務めている伊藤隆介さんにもお声をかけてトークショーをやることに決め、質問や議論したい点をメモにしてふたりに送った。

当日、小さな会場は35人以上が詰めかけて冷房の設定を26℃から21℃に下げるほどの熱気に包まれたが、トークが進むほどに底冷えのするアートの現場が目の前をよぎり、頭の芯までしびれてきた。

まず、親と社会の価値観を背負って平穏な道を進もうとする学生たちがいる。教育が大事なときに就活優先で美術の基礎ができないまま卒業。北海道による美術科の教員採用が少数にとどまるなか、団塊世代の退職教師が囑託で再雇用され、就職の道はますます細くなる。また、大学が学生を就職させようと力をこめればフルタイムの教授は純正教員にならざるをえず、美術家兼業という選択が幸せな終着駅ではなくなる。

外を見れば、予算がないので作品を買えない美術館があり、相手は若くても作家なのに、大きなビル工事の仮囲いを「制作させてあげよう」と上から目線で提供しつつ、ペイント代さえ払おうとしない実業家がいる。売れない絵が産業廃棄物のようにたまり、自分はもはや墓守りかと自問する美術家は、別の仕事で暮らしを立てながら制作のモチベーションをどう保とうかと悩む。

このような統計やアンケート調査では見えない話にふれると、アートの力が縮小再生産され続ければ観光文化都市を謳おうにも経営の基盤がガタガタになるぞ、と心配が強まる。暮らしにアートは要るか、マーケットは自由放任でいいか、美術の仕事をつくるプロデューサーをどうつくるかといった問題をまじえて、話はこの先もその先も続かざるをえない。（伏島信治）

《支部活動報告》 関東支部活動報告

去る2012年9月27日に文化経済学会関東支部の研究会を埼玉大学東京ステーションカレッジにて行いました。参加者は10名で、18時～20時の間での開催となりました。スタートが少し遅れたため、1時間のご報告と30分の質疑応答という形になりましたが、非常に充実した研究会となりました。

今回のテーマは電子書籍で、インプレスホールディングス取締役の北川雅洋氏に「電子書籍の本格化により何が起ころのか？」というテーマでご報告頂きました。北川氏は本の定義から話題を展開し、電子書籍のメリットとデメリットを分かりやすく的確にお話しされました。まずメリットでは、電子書籍はデータであるためどのような画面のサイズにも対応する点、価格設定の自由さ、返品を考慮しなくても良い点などを挙げられました。一方でデメリットでは、新刊が出ると実際の書店では平積みやレイアウトなどで視覚的に消費者に訴えることができますが、電子書籍では消費者に新刊を認知させることが困難な点、リスロー形式（文字や画像などのアップ）になじまない書籍が日本に多いなど、電子書籍特有の問

題を挙げられました。また、北川氏はヒアリングによるエディターの電子書籍に関する意見や、本の技術革新の歴史にも触れられ、さまざまな視点から電子書籍についてまとめて下さいました。特に書籍に関する制度については、日本だけではなく他国との比較を分かりやすくご説明され、問題の所在がとても明確であった点が印象的でした。専門的な用語や事例もユーモアを交えた分かりやすいご報告であったため、電子書籍の知識がなくても十分に理解を深めることができました。

日本でも電子書籍については多くの可能性、そして問題点が指摘されています。北川氏は電子書籍のフォーマットの問題や、コンテンツ数の不足などを指摘され、今後の電子書籍を考える上でクリアしなくてはならない課題を的確に問題提起されました。ご報告後は研究会に参加された方々から多くの質問が寄せられました。その後、希望者で懇親会を行い電子書籍を始めとするさまざまな話題で活発な議論が行われました。

すっかり秋らしくなった9月末の関東支部研究会は、北川氏の素晴らしいご報告と多様な目的意識を持つ参加者によって大成功のうちに閉会しました。関東支部研究会は今後も継続して行います。皆様のご参加をお待ちしております。（牧和生）

《支部活動報告》 東海支部活動報告

東海支部では、年に3回程度の頻度で研究会を行っている。今号では、本年9月に行った以下の研究会について報告する。

第6回東海支部研究会

2012年9月21日（金）17時～18時30分

報告者：Helen Higgs 准教授（Griffith University）

論 題：Australian Art Market Prices during the Global Financial Crisis and Two Earlier Decades

開催場所：名城大学・名駅サテライト（MSAT）

オーストラリア・クイーンズランド州にあるGriffith大学のHelen Higgs氏は、計量経済学をバックグラウンドにもち、様々な経済の分野で精力的に実証分析を行っている。文化経済学に関しては、主にオーストラリアの

美術品市場を対象とした美術品の価格決定に関する研究をされ、いくつかのジャーナルに成果を公表している。6月に行われた国際文化経済学会（ACEI）の京都大会にはHiggs氏は参加されなかったものの、共著論文をエントリーしており、共著者の方が参加し報告している。

美術品価格の実証分析は、ACEIの大会プログラムをみてもわかるように、文化経済学において1つの大きな分野を形成している。しかしながら、日本ではほとんど研究が行われていない。そこで本研究会では、入門的な話も含めて講演していただくようお願いした（なお報告は英語で行われたが、適宜、日本語で簡単な要約を入れ、途中でヘドニック指数について日本語の解説も行った）。

本研究の主要な目的は、オーストラリアの美術品市場に関して、対象とする標本期間（1986年～2009年）の四半期ごとの価格指数を算出することである。これまで、年指数（ないしは半年指数）がメインであったが、

四半期指数を算出することによって、より詳細に経済変動との関連をみる事が可能になる。特に、最近のデータを含めることによって、いわゆるリーマンショック(世界的金融危機、Global Financial Crisis; GFC)以後の美術品価格の動向の特徴が、他の市場(株式市場や住宅市場)との比較において、明らかにされた。

美術品の価格指数を算出するために、本研究では、オーストラリアにおける主要な6つのオークション(Australian Art Auctions, Christies, Deutscher-Menzies, Lawson Menzies, Leonard Joel, Sotheby's)で取引されたオーストラリアの著名な17名の芸術家の約64,000の取引データが用いられた。その落札価格を被説明変数とし、説明変数として、①作者の名前や作者が生きているかどうか(ダミー変数)、②作品の媒体(油絵、水彩、エッチング…;ダミー変数)、③作品の物理的特性(面積、面積の2乗など)、④取引が行われたオークション(ダミー変数)、⑤時間変数などを用いてヘドニック回帰を行い、時間変数の係数をもとに、美術品のヘドニック価格指数が推定される。そして、その価格指数の推定値をもとに、以下のような分析を行っている。

まず、各説明変数の統計的有意性などを確認した上で、美術品の価格指数と株式指数・住宅価格指数の対応関係を検証し、経済状況との関連でその変動の説明が試みられる。実際、各市場はある程度の対応関係が観測されるものの、各市場の収益率の変動を分析すると、美術品の収益率の平均(リターン)は株式や住宅より低く、リスクも大きい。また、リーマンショック前後で標本期間を分けた分析によれば、住宅価格は政府による補助金の影響もあって、リーマンショックの影響をあまり受けていないが、美術品と株式は大きな影響を受け、リターンはマイナスになり、リスクも大きくなったことが観察されている。また美術品価格と株式・住宅の価格の収益率の相関は低く、このことは、資産運用を行う際、株式や不動産に美術品をポートフォリオに加えることによって、リスクを軽減することが可能になることを示唆していると結論づけられた。

こうした報告内容に対して、美術品・株式・住宅の価格指数自体の相関とその収益率の相関の違い、美術品の場合は株式とは異なりそれを鑑賞することによって効用が得られ、性質が異なるのではないかなどの指摘がなされた。さらに、日本においてなぜこのような分析が行わ

れていないのかについても、議論された。日本の場合、オークションよりもギャラリーにおける取引が中心であり、現在の日本人の画家で国際的に取引されているのは限られているといった実状が、こうした分析を行うための基礎データ自体を乏しいものとする要因となっていることなどが指摘された。本報告で用いられたオーストラリアのデータは有料データで、利用に対するハードルは低いものの、電子データで利用可能であり、日本との違いも明らかにされた。

議論はつきなかつたが、Higgs氏は研究会当日の朝にオーストラリアから到着したこともあったため、ある程度で質疑応答を留め、MSATのラウンジでワインなどを酌み交わしながらの懇親会へと話の場を移した。Higgs氏の夫のTerry Higgs氏(コンピュータ関係の仕事をされており、本研究の計算をサポートしたとして論文のacknowledgementに名前を連ねている)も合流し、少人数ながら非常に温かい雰囲気の中で時間を過ごすことができた。そして最後には、2年後にモントリオールで会いましょうと言って散会した(ACEIの次の大会は2014年にモントリオールで行われる)。多少のリップサービスはあったかもしれないが、このような雰囲気の良いセミナーは初めてだとHiggs氏は非常に喜んでくれた。

Higgs氏の滞在日程がなかなか固まらず、研究会の設定が直前になってしまったこともあり、参加人数があまり多くなかったのが残念であったが、その分、アットホームに交流を深められたと思う。東海支部の研究会で海外からのスピーカーを呼ぶのは初めての試みであったが、参加した方々が積極的にコミュニケーションをとって下さり、とても有意義なものとなった。

なお、本研究会の開催に対して、文化経済学会<日本>ならびに名城大学経済・経営学会からの援助を受けた。記して謝意を表したい。(勝浦正樹)

2014 年度研究大会・秋の講演会 開催地公募のご案内

文化経済学会<日本>では、2014 年度の研究大会（6～7 月頃）及び秋の講演会（10～11 月頃）の開催地を公募しております。

■応募方法 「(1) 応募申込用紙」「(2) 応募企画書」の 2 点をお送り下さい。各応募用紙の書式の見本については、事務局 g018jace-mng@ml.gakkai.ne.jp までお問い合わせください。

■応募資格 会員であること

■応募〆切 2012 年 11 月 30 日（金）必着

■送付先 g018jace-mng@ml.gakkai.ne.jp、もしくは
〒170-0004 東京都豊島区北大塚 3-21-10 アーバン大塚 3F
(株) ガリレオ 学会業務情報化センター内
文化経済学会<日本>事務局 宛

○開催地および担当する会員の担務

研究大会もしくは秋の講演会の運営にかかる全般をご担当いただきます。たとえば、パネリストなどへの交渉、会場設営、受付・分科会などの準備と対応、アルバイトなどの人手の確保などで、必要な場合には助成金の申請も行っております。

なお、事務局は、基本的に会員向けの広報、参加申込の集約、会場設営などについての助言、当日受付のサポート、予算内の会計の精算を担当します。

皆様の積極的なご応募を期待します。

■参考資料 研究大会・秋の講演会会場一覧

●研究大会

2004	埼玉県	跡見学園女子大学
2005	鳥取県	米子コンベンションセンター
2006	福岡県	久留米大学
2007	埼玉県	埼玉大学
2008	北海道	北海道大学
2009	岐阜県	可児市文化創造センター
2010	兵庫県	兵庫県立大学
2011	愛知県	名古屋大学
2012	熊本県	熊本大学
2013	東京都	東京大学

●秋の講演会

2004	石川県	金沢 21 世紀美術館
2005	東京都	芸能花伝舎
2006	高知県	ヨンデンプラザ
2007	富山県	瑞龍寺
2008	宮城県	せんだいメディアテーク、東北大学
2009	静岡県	静岡文化芸術大学
2010	新潟県	新潟産業大学
2011	東京都	青山学院大学
2012		(国際文化経済学会開催のため開催せず)
2013	北海道	(未定)

第XI期 文化経済学会<日本> 役員について

本年に行われた役員選挙および9月29日に開催された第XI期第1回理事会の結果（理事長互選）、第XI期の役員は下記のような構成となりましたので、ここにご報告を申し上げます。

第XI期 [2012-2013 年度] 役員

会 長	清水 裕之	名古屋大学	佐々木雅幸	大阪市立大学
副会長	河島 伸子	同志社大学	友岡 邦之	高崎経済大学
理事長	勝浦 正樹	名城大学	中谷 武雄	
個人理事	有馬 昌宏	兵庫県立大学	野田 邦弘	鳥取大学
	井口 典夫	青山学院大学	藤野 一夫	神戸大学
	伊藤 裕夫		藤原 恵洋	九州大学
	衛 紀生	可児市文化創造センター	増淵 敏之	法政大学
	太下 義之	三菱UFJ リサーチ&コンサル ティング (株)	美山 良夫	慶應義塾大学名誉教授
	小野田泰明	東北大学	本杉 省三	日本大学
	片山 泰輔	静岡文化芸術大学	八木 匡	同志社大学
	川井田祥子	大阪市立大学	山田 太門	(一般社団法人) 公共経済学 研究所
	川崎 賢一	駒沢大学	吉本 光宏	(株) ニッセイ基礎研究所
	北村 裕明	滋賀大学	米屋 尚子	(社) 日本芸能実演家団体協 議会
	草加 叔也	(有) 空間創造研究所		
	熊倉 純子	東京藝術大学	団体理事	現在調整中
	後藤 和子	埼玉大学	個人監事	曾田 修司 跡見学園女子大学
	小林 真理	東京大学	団体監事	現在調整中
	佐々木晃彦	新潟産業大学		
	佐々木 亨	北海道大学		

* 所属先は 2012 年 9 月 1 日現在のものです

季刊「文化経済学会」 No. 82
2012 年 10 月 31 日発行
ISSN 0918-3787

発 行 文化経済学会<日本>
発行人 清水 裕之
編集人 佐々木 亨

〒170-0004 東京都豊島区北大塚 3-21-10 アーバン大塚 3F
(株) ガリレオ 学会業務情報化センター

E-mail : g018jace-mng@ml.gakkai.ne.jp

URL : <http://www.jace.gr.jp/>

© 2012, Japan Association for Cultural Economics